

の知人ポルジ博士（ケンブリッジ大学）、米国は英国留学時に知りあったチャン博士の手をお借りして案を作成した。一方、この機会に、ケンブリッジのマン教授からは、私が日本で行ってきた精子研究の概要を報告してほしいとの要請を受けた。また、ミュンヘン大学とハワイ大学では特別講演を依頼されるなど、調査とは別に緊張の続く出張になった。

調査先のケンブリッジの研究所には、留学当時の研究員が数名残っており歓迎された。とくに、留学時は分野の違いから接触が少なかったポルジ博士が、今回主役となって面倒を見てくれ、結局当地に10日間の滞在となった。退職1年前だった所長のマン先生はご自宅に私を招き、ご夫妻の前で私が日本から持参した精子、精液関係の報告についての説明を求められた。瞬間、国際会議で発表するような緊張感を覚えた。後日、選ばれた報告11篇が、先生ご夫妻の共著による新

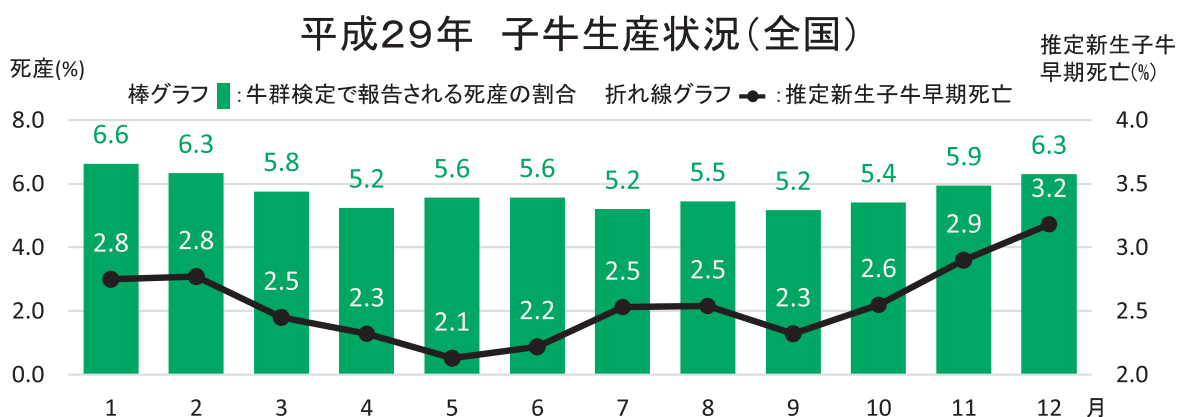
書“Male Reproductive Function and Semen（雄性生殖機能と精液）, Springer-Verlag社, 1981”に引用、紹介されたのを知って、感激したのを思い出す。

#### 10) 畜産試験場時代の後輩

畜産試験場に在職した23年間で振り返ると、適材適所の人事がなかなか進まず、新人の採用も厳しいなど、研究環境は必ずしも万全とは言えなかった。しかし、その中でも雄畜相手の研究室には、米国チャン博士の下に留学できた花田章君や西川教授の下で大学院教育を終えた枡田博司君、雌畜対象の研究室には、子宮液の性状を追及した菅徹行君、下垂体ホルモンのラジオイムノアッセイで繁殖研究をリードした森純一君らの俊英が育った。さらに、胚移植関係では、杉江博士の後継者と期待され、若くして夭折した福光進君らが在籍していたことも忘れられない。

## 牛群検定ビッグデータ（その6） ～平成29年子牛生産状況（全国）～

牛群検定のビッグデータからわかるいろいろなことを本コーナーで紹介していきます。



牛群検定で報告される死産の割合（棒グラフ）と推定新生子牛早期死亡（折れ線グラフ）の推移を月毎にみたものです。一般的に言われているとおり、死産及び子牛の死亡率は、冬季に高くなるようです。子牛の損耗を1頭でも少なくすることは、安定した酪農経営に結びつきます。

検定成績表や繁殖台帳Webシステムで農家個々の値も確認しましょう。

#### 推定新生子牛早期死亡：

牛群検定における母牛の分娩報告と個体識別の出生報告を突合し、分娩報告があるにもかかわらず、出生報告がなければ、子牛は生後1週間程度の早期に死亡したと推定した頭数（％）。

詳細はLIAJニュース166号をご参照ください。